

ラケットスポーツの誕生に至る経緯と発展史の研究 ―バドミントンとテニスについて―

A study of the way of the birth and history of development of Badminton and Tennis.

1K04B070-4

北山 雄一郎

指導教員

主査 関一誠先生

副査 石井昌幸先生

目的

スポーツの誕生から発展までの経緯は、生物のそれに似ている。最初の生物は海で生まれ、やがて肺を持つようになり、陸上に上がった。単細胞生物から多細胞生物、プランクトン、魚類、両生類、昆虫、爬虫類、鳥類、そして哺乳類へとより高等な生物へと進化した。その過程で環境の変化に適応できなかった生物は滅び、また生き残った生物の中でもいらない特徴や器官は退化した。スポーツも同じである。ある人が石ころを蹴った、もしくは投げた。それを見た人が自分もそれを蹴り、または投げる。そうしたなんでもない動作と動機がきっかけとなり、そのひとつの動作に一連の目的やゲーム性、意味が生まれ、やがてそれがより工夫され、技術や道具の進歩によって多くの人の賛同を得て一種のスポーツとして認識されるようになる。生物と同じようにスポーツも進化と退化と滅亡を繰り返し、現在の「かたち」になっているのである。

さて、この研究は、今日においてラケットスポーツとして代表的なテニスとバドミントンのそれぞれの起源を探り、どのような経緯を経て発展・確立されてきたのか、またその共通点と相違点を比較し、それぞれのスポーツが誕生した地域の文化や歴史的背景などを探ることが目的である。

第Ⅰ章:バドミントンの起源と発展史

シャトルコックを使ったゲーム(遊び)は古くから世界のさまざまな場所・地域で行われていた。その一つとして日本にも“羽根突き”という伝統的な遊びがある。中世ヨーロッパにもシャトルコックを使った“バトルドアー & シャトルコック”と呼ばれるゲームがあり、同じ頃インドで行われていたシャトルコックゲームと融合して現在のバドミントンへと進化し、国際バドミントン協会(IFB)が誕生した。

第Ⅱ章:テニスの起源と発展史

テニスはフットボールと遠い親戚関係にあり、その原型はボールを手のひらで打ち合う“ジュ・ド・ポーム”といわれるゲームである。そのゲームは中世のフランスで確立し、当時のフランス人の生活に密着して

発展した。その後、手の代わりにラケットを使い始め、ルールの改正により技術的にも競技的にも大きく変化することになる。

考察

バドミントンとテニスは起源的には時代や地域や方も異なるが、ともに中世のヨーロッパのラケット競技である“ジュ・ド・ポーム”に影響され、その得点方法や技術の変遷、世界への普及にいたる過程には相違点が多く、その競技を行っていた人たちの性格や文化的背景、その競技自体の特徴が大きな影響を与えていたことは興味深い。

バドミントンに使われているシャトルコックを使ったゲーム(遊び)は、もともとは儀式的に行われていたものが多く、吉凶や豊作を占うことを目的に行われていた。一方、テニスに使われているボールを使ったゲーム(遊び)は、もとは身体鍛錬のため、その後は貴族の娯楽や賭け事に使われるようになりギャンブル的要素が加わった。

まとめ

スポーツとは生き物であり、かつ行われる人間によって都合のいいようにその形態が絶えず変化させられる“乗り物”のようなものであると考える。

人は太古の昔からスポーツという“乗り物”に乗り、日常生活では手に入れられない快感や充実感、爽快感、または地位や名誉や富を獲得する旅をしているのかもしれない。



LO SPORT NELL'ARTE